

江川三郎

江川三郎語録 第4回

EARのパラヴィーチーニ氏の 経歴と江川氏とのエピソード

今回は、村井裕弥氏(写真左)とともに江川三郎氏の療養先を訪ね、ティム・デ・パラヴィーチーニ氏との交流を含め、エピソードを伺った



江川氏の旧友、EARのティム・デ・パラヴィーチーニ氏が7月末に来日。今秋から、EAR製品の日本国内での販売が、新たな態勢で開始されるとの情報が届けられた。そこで今回は、江川三郎氏とティム・デ・パラヴィーチーニ氏との交流を含めた逸話を交えながら、パラヴィーチーニ氏の経歴を概括してみることにした。

●レポート
村井裕弥
Hiroya Murai

●東洋管とアナログの巨匠、 パラヴィーチーニ氏の経歴

江川氏との関わりを含めて、意外と知られていないティムの人物伝を知る

4月28日、前号取材のため江川三郎氏のお宅を訪ねた時、「近日中に、また温泉療養施設設けの病院に入院するかもしれん」という事前情報は聞いていた。

「いいですねえ。毎日温泉三昧ですか。去年もそこにしばらく入院して、具合よくなったんですね。年に一度、命の洗濯だなんて、ホントうらやましい」

「いや、そんなうらやましい話じゃないんだよ。ここにいれば安心なんだけど、僕は家にいた方がよほど楽しい(苦笑)」

しかし温泉療養施設設けの病院は人気があり、なかなかベッドの空きが出ない。そうこうするうちに月日が経ち、気がつくとう東京文化会館、アテフ・ハリムのリサイタルで、ごく近くの席に座っていらつしやる。その時はたいそうお元氣そうに見えたので、ひと安心。結局、江川氏が入院できたのは6月15日だった。その情報は、江川氏不在でも秋葉原でイベントを継続維持している仲間からもたらされたが、入院後に各種検査した数値が予想よりも良くないた

め、9〜10月ぐらいまでは大事を取って療養を続けるようである。

一方、前号の反響は大きく、筆者の元にも何本か直接問い合わせが寄せられた。

「パラヴィーチーニのCDプレーヤーがどんなものか、もっと詳しく知りたい」

「一体、いくらで発売されるのか」

しかしこのCDプレーヤーACUTE IIIは、なかなか輸入元のウェブサイトに姿を見せない。そうこうしているうちに編集部から電話があり、「パラヴィーチーニ(ご自身と奥様、ご子息が揃って編集部に来社)、この秋からは奥様が代表を務める会社、ヨシノトレーディング株式会社(新たな日本への輸入元になる)のでよろしくと挨拶があった」とのこと。

これは面白いことになってきた。これでパラヴィーチーニ製品が、より正しい評価を受けられるようになるのではないか。そんなことを考えつつ、筆者は担当編集者と、江川氏の療養先を目指した。

江川氏はその病院の2階で、ちょうどお昼ごはんを召し上がっているとこらだった。筆者と担当編集者が挨拶すると、少し驚かされたようで、「ここに入ったことを、一体どうやって知ったんだね」とおつしやる。



実験室

そこまでは、これまでのあらましを説明。「パラヴィチーニもぜひお会いしたいと言つたそうですが、今回はどうしても時間が取れないと残念がついていたと聞きまして」

「タイムがそんなことを言つたのかね」「ええ。たいそう心配されているようで。しかし、より理想的な輸入元ができてよかつたですね。デイスクマスター（EAR初のアナログプレーヤー）が発売された時、『このプレーヤーをもっと世に広める必要がある。そのために、僕がこれを輸入して日本中に売ろうと思うんだが、並行輸入してどうやってやるんだ？』って、皆に訊いて回つてたですよ」

「そんなことも、やってたかねえ（笑）」
「アナログといえば、アテフ・ハリムがマルティヌを弾いたCDも、あのデイスクマスターがなかったら、最高のマスターを作ること（板起こし作業）ができなかつた。というわけで、『今回はぜひパラヴィチーニに関するお話を、先生から伺いたい』と思つてここまで来たんです。日本人は人物伝が好きですが、皆、ジェームズ・バロー・ランシングやマーク・レヴィンソンほどには、パラヴィチーニのことを知らない。いえ、知名度はかなりのものですが、詳しいことはほとんど分からない」

「じゃあ、いまの読者たちは、パラヴィチーニがラックス（現ラックスマン）でトランス設計をしていたことなんか知らないのかね」

「知っているのは一部の人のだけです」

●鬼才タイム・デ・パラヴィチーニの経歴
幼少時代から無類の機械好きで
目に留まるものは何でも分解した……

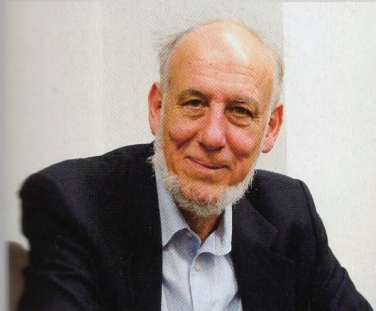
日本では、デ・パラヴィチーニというといふぶん長い姓だし、しかもスミスとかジョンズなどと違って、英国の名前らしくないと思う向きも多からう。その通り、これはイタリア語で、イタリア人の姓だ。しかもdeというのはof、すなわち「の」という前置詞で、それがつく人は「貴族の血を引く者」ということになる。「デ・パラヴィチーニ家」はイタリアの名門貴族であり、中世にスイス、フランス、イギリスなど各地にその勢力を広げ、16世紀エリザベス1世の時代に渡英。それから数えても400年の歴史を誇る。「初代」デ・パラヴィチーニはその名をホレーシオといい、一説によれば、シェイクスピアの「ハムレット」に出てくるホレーシオのモデルともいわれる。

タイムの父親はケンブリッジ大学で数学を専攻し、首席で卒業。母親も数学教師。伯父はロールスロイス航空機エンジンのデザイナー。そんな学究的（それもすこぶる理系的）な環境の中でタイムは生まれ育ち、エレクトロニクスや数学などを独学で身につける。天才であるがゆえ、学校教育のスピードには合わせていられなかつたのだらう。

しかし彼はただ書物を読み、数式を解くことに明け暮れていたわけではなく、機械いじりを何より好んだ。自動車でも、テレ

ビでも、ステレオ装置でも、目にとまつたら、バラバラに分解してしまわないと気がすまない。そのため、周囲の人々は「自分の大切なもの」を彼に見せないようにしていたとも聞く。

それから何十年も経過しているというの



EARのタイム・デ・パラヴィチーニ (Tim de Paravicini) 氏。アナログ技術だけでなく、その長年の確かな技術力と元々、最近ではデジタル技術にも熱心に取り組む



タイムのご子息、ネヴィン・デ・パラヴィチーニ氏。ただいま製品のデザインを勉強中とのこと



EARは、プロフェッショナル機器からコンシューマー機器まで、幅広い分野のオーディオ製品をラインアップし自社生産している



イギリスのケンブリッジに拠点を構える、タイム・デ・パラヴィチーニ氏の主宰するEAR (Yoshino Limited) 本社。旧社屋が手狭になったことから、新しい建物に移転したばかり

に、タイムの分解くせはいまも収まらない。しかし、彼はもう子どもではないから、既存の機器をバラバラにする過程でその仕組みを理解し、構造的な欠陥を把握してそれを根本的に解消することができる。それは修理の範疇を超え、もはや創造の域に達

● **ありきたりのものは作らない、謎の人物、伝説の人**
日本でも活躍し独創的な設計で高評価
その後EARを設立し前進を続ける

チームのエンジニアとしての活動は、1966年に南アフリカで始まった。日本に移住したのは72年。ラックスでトランジスターアンプM4000、M6000などの機種設計に携わり、高い評価を受ける。江川氏によれば、「チームが設計するトランスは、NFB専用の三次巻き線が特徴で、これにより一次巻き線との位置関係のよさが保てるし、スピーカからの反動の大きさも防ぐことができる」とのこと。

77年イギリスに戻り、翌年Esoteric Audio Research社 (EAR) を設立。彼ほどの才能があれば、ロンドンやニューヨークの檜舞台に本社を構えることも可能であったろうに、あえてケンブリッジ大近郊の片田舎を選び、半ば「仙人」のように暮らす。天才的なひらめきの元、突如仕事の鬼と化す彼にとっては、そういう場所の方が邪魔が入らなくて都合がよいのかもしれない。

EARのアンプといえば、真空管を連想される方がほとんどだろう。だから中には「極度にノスタルジックな音」を想起される方がおられるかもしれない。しかしチームは、そんなことを考えて真空管を採用しているのではない。彼は実はトランジスタを使っても、同じような音質のアンプを作ることができる。しかしあえて真空管を使うのは、「得も言われぬ独特の雰囲気」を表現

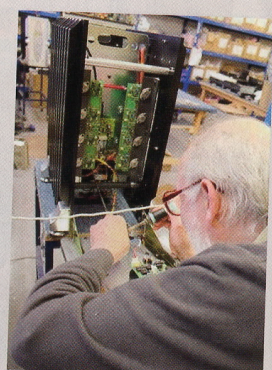
するためののだ。

彼と話したり、彼が作った製品の細部を見たりすると、彼がいかに独創的な人間であるかがすぐ分かる。アナログ回路への徹底したこだわり、コストを無視し、それが時代と逆行しているか否かなどは眼中にない。そのため彼を「変人扱い」する人間は多くいるが、彼はそんなことを気にしない。何をいわれようと、我が道を行く。それも片田舎で。

チームは、彼が従来の常識にとらわれず、自分独自の理論と実験により、前人未踏の領域を前進していく。だから、彼がいくらでいねいに説明しても、普通の人間はその理論に着いていくことが難しい。彼は「特別に変わったことをしている」という気などさらさらないのだが、そんな彼を世間の人たちは「謎の人物」「伝説的な人間」と呼ぶようになる。EARのEはエンテリックだが、「深淵で、少数の人間にしか理解されない」「深い」「密教的な」という意味を持つその単語は、チームを表すのにふさわしい。

しかし、本当に音にこだわっている人たちは、世に氾濫しているありきたりの製品に満足できず、EARの製品に出会ったが最後、その虜となってしまう。

そんなチームの才能に最初に気づいたのは、オーディオ業界人であった。その代表格は、あのミュージカル・フィデリティ社長(当時)のアンソニー・マイケルソンだ。彼は「チームのデザイン(外観にとどまらぬ用語)はシンプルなようでいて、完璧に論理的。モーツァルトの音楽のようなもの



EARのアンプは全てカスタムトランスを搭載。オリジナルのデザイン(外觀だけでなく回路も含む)でなければ、作る意味がないとの確固たるポリシーを掲げている

PS
EAR-Yoshino



アンプを組み立て中のティム・デ・バラヴィーチーニ氏。2005年に江川氏がEARを訪問した時は、ちょうど開発したてのDISC MASTERを組み立て中だった

真空管とアナログの巨匠、バラビチーニ氏がデジタルに取り組むところになった! ACUTEMは、CDのみならずUSB再生にも対応のデジタルプレーヤー。低ジッタークロックとDAC、独自デザインのアナログフィルターを搭載し、PCC88 TUBEライン出力段を通じて出力。直接パワーアンプを駆動するためのアナログリモートコントロールボリュームも備える(前号にてレポート)

だ」とチームを絶賛し、自社のコンサルタント・デザイナーに迎えた。その間に、同社の製品(例えばA370)が世界的に認められるようになったことは、皆様もご承知のことと思う。

「江川先生は、その頃、バラヴィーチーニに出会ったんですね」

「そうだね。あれは確か、シカゴで行われたコンシューマー・エレクトロニクス・ショーだ。76年頃の夏だった。彼が作ったアンプで、スタックスのコンデンサー型スピーカーを駆動したら、実によく鳴ってね。以後、彼とは自宅を行き来する仲になるんだ

が、お互い、いろいろな情報交換をしたものだ。そういう時、バラヴィーチーニは、いつも『あまりほかの人に教えるな』と笑っていた。当時彼は、レコーディング・スタジオなどで使われる業務用の機器も、ずいぶんたくさん作っていたね」

そう。録音業界の腕利き達も、チームの特異性に間もなく気づく。幼少期からの分解・せにより、チームはプロ用テープレコーダーをもバラバラにしてしまう。そしてその問題点を見抜き、分解前より数段上の性能を持つマシントと組み上げる。その代表格がステューターC37だ。このテープレコーダ

1は、あのアンベックスMR70さえ凌駕する傑作機だが、ティムの手に掛かると、30Hz〜15kHzだった周波数特性が7Hz〜35kHzへと拡大し、SN比も75dBが90dBに向上！

●ティムの機器を使って作られた音楽ソフト
江川氏の協力による興味深い秀作など音楽業界にも深く貢献を続けている

そんなティムの機器を使って作られたソフットの代表作といえば、やはりライ・クラーとヴィシユワ・モハン・パットによる「ア・ミーティング・バイ・ザ・リヴァー」だろう。93年にリリースされ、同年グラミー賞「ベスト・ワールド・ミュージック・アルバム」受賞。

クラーは、アメリカを代表するスライド・ギターの名手。世界のルーツ・ミュージックに強い関心を持ち、様々なミュージシャンと組んで演奏活動を行う。ヴィシユワ・モハン・パットはインド、ラジャスタン生まれのギタリスト。70年にレコード・デビューしているが、本作で国際的に知られるようになった。クラーが主にボトルネック・ギターを、パットはモハン・ヴィーナ（共鳴弦がついたインド版スライド・ギター）を弾いている。印象は、シタールで演奏したインド伝統音楽に限りなく近いが、ホットかつウェットな音調と中域の力に強く惹かれる。油断していると、打楽器の重低音バースに腹をやられることも。

ちなみに、このアルバムを担当したエンジニアはKavi Alexander（ウォーラー・リリー・アコースティックス）だが、

彼はこの録音について「堂々とした存在感、温かさ、そして純粋さ」と語っている。それを実現するためには、どうしてもティムの手によって改良された機器が必要だったのだ。ほかにも例を挙げよう。もしあなたが超絶技巧ピアノ音楽のマニアであるなら、ALTA RUSレーベルは看過できぬ存在であるはずだ。ソラフジ、ゴドフスキー、プゾーニのファンにとっては命綱としても呼ぶべき存在。この社長兼シニア・プロデューサー（当時）のクリス・ライスは、ティムが改良したスチューダーC37を常用。「ティムのおかげで雑音が減り、音はダイナミックになった。音質はクリーンだ」「マイクロフォンから入ってくる音が、正確に表現される」と絶賛。

ライスはまた、ティムの傑作パワーストーンPEARR549も愛用。その理由を「比類のない音の正確さに惹かれる。これでモニターすると、細かいところまでレコーディングできる。入力する音を歪曲させず、へたな解釈を加えず、そのまま再現する」と語っている。

この2人以外にも、サム・リヴァース、ヴィンス・クラーク、ダン・シヴァルツ、トニー・フォークナーといった業界人が、ティムの業績を熱烈支持しているのだが、もう誌面がない！

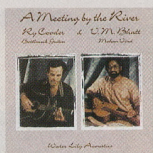
本誌第93号を開くと、そんなティム理解者の一人、リチャード・ブラックが、江川氏の友人、片山敬子氏のピアノ演奏を録音する話が載っている。何と、マイクからカッティングマシンに至るまで、全てティムの

自作あるいは改良品だという。

また本誌第119号には、ティムがEAR初のアナログプレーヤー、デイスクマスタールを組み立てている写真も載っている。磁気結合により、モーターの振動から解放されたターンテーブル、削り出しのテーパードアームなどユニークな発想に満ちたプレーヤーだが、最大の特色はその静かさで滑らかさ。江川氏はその原稿を、「CD普及時に（略）デイスクマスタールがあったなら、デジタルの様子も変わっていた（あんなには普及しなかったに違いない）」と結んでいる。

●江川工房の最新情報●

「江川工房/サウンド・ナチュラーレ」では、本誌137号で紹介したスピーカー修理用の鹿皮エッジ販売/修理サービスのほか、これまでに江川三郎氏が独創的なアイデアで考案した、手作り吸音材の吸音浮雲、6N無方向性ピンケーブル、スピーカーケーブルなどのオリジナルグッズを取り扱っている。吸音浮雲(¥12,600)は、材料が従来より良い材料(羊毛100%)に変更されて入手可能となっている。
(有) 江川工房 問い合わせ
担当: 峰谷 090-8462-4116
〒166-0004 東京都杉並区阿佐谷南3-13-19
E-mail: info@egawakobo.jp
●江川工房/サウンド・ナチュラーレ
http://www.egawakobo.jp/
●近況報告
http://blog.goo.ne.jp/sound_koboneko/



ティムの機器を使って録音された、グラミー賞受賞アルバム「A MEETING BY THE RIVER」



DISC MASTERを使って板起こしを行った、ヴァイオリニスト、アテフ・ハラムのCDソフト、「近代作曲家二重奏曲集」(W W C P - 7139、¥2,100) ナシロード



イギリスと日本を歩き来しての、ハラヴィチーニ氏とのエピソードを語る江川氏。そこでは、さまざまな画期的なアイデアが飛び交っていたようだ



アナログプレーヤーDISC MASTER。ドライブ方式は、「エアーフローティング&エレクトロリカルノンタッチドライブシステム」。約3mm浮遊させてターンテーブルを駆動。モーターは超精密医療用のコアレス型を搭載

●EAR製品の取り扱い: ヨシノレーディング (株)
〒443-0005 愛知県蒲郡市水竹町上大塔49番地1
TEL: 050-3375-3975
E-mail: info.earjp@gmail.com

10月7日から9日に有楽町交通会館にて開催される「ハイエンドショウトウキョウ2011」にて、同社は出展ブースを構える予定なので、こちらの内容にも大いに期待したい